

神奈川工科大学 KAIT 工房

正会員 石上純也 君

大学キャンパスのほぼ中央に建つ KAIT 工房は、広場を内包したショーケースのような建築だ。トップライトからの陽光で内部の柱群が白く輝き、建築が周囲から明るく浮かび上がる様は鮮烈で、未知の異空間が突然そこに出現したかのような錯覚を覚える。用途としては、学生達に物作りのためのきっかけを与え、創作意欲を育むとともに、地域開放も視野に入れている。プログラムの見れば、初歩的な加工機器類と作業スペースが用意される以外にはトイレすらなく、他は特化された機能をほとんど持たぬフリースペースだといえる。

学生のいない休日ではあったが、45m 四方の空間内は、無数の柱群によって不思議な関係性が張られ、微かに活気づいており、今まで体験したことのない場だと気付かされる。単なる機能主義からこのような場が生まれるべくもなく、設計者の意図が、均質な空間を、柱群による物体性や視覚的透過性のバラツキによって、不均質な密度感の場に変質させることだったと分かる。また柱群の粗密によって移動に伴う身体的抵抗感が変化することで距離感が収縮したり、柱の分布のムラがさまざまな溜まりの場をつくることで、それに見合った活動を誘発したりもしそうだ。総数 305 本に及ぶ柱はさまざまな断面の鋼製フラットバーから成り、鉛直、水平応力をおのおの受け持つ柱に分担されているが、そのか細さは構造柱のイメージを完全に逸脱しているため、無重力感すら漂う。

2 年の設計期間の大半は柱の配置や断面太さ、向き等のスタディに費やされた。設計者は家具、加工機器類の大きさ、数、位置、搬出入路等を設定しつつ、人間の多様な活動をイメージしながら柱を立てていった。また移動時の視覚的透過性の変化を把握するため新たなソフトが開発され、視点の移動に応じて刻々と変わる、全方向の柱群の重なり具合が数値化された。そして最終的に 1/20、1/3、原寸大の模型により確認、決定していったという。こうした過剰ともいえる執拗な検証を通して、柱の多さに対する関係者の懸念を解消しつつ、自己の追求する空間を徹底的に実現しようとした努力と執念には感嘆させられる。

その反面、森をイメージしたというのが外界と内部とが環境的に隔絶していること、FIX ガラスやトップライトの熱負荷対策が皆無に近く、加工作業に伴う粉塵や臭気に対する空調換気設備が万全と思えないこと、計画として機能を省きすぎたため、建築よりも環境アートに近づいていること等、建築としてのトータリティを欠き過ぎていないかという懸念が最後まで残った。また設計者が狙った“霧のように濃度の変化する場”は、“柱が無数にある”という支配的知覚に回収され、顕在化していなかった。しかしながら、ここには空間の根本的性格と架構体のあり方を全く同一化しつつ、建築空間を初めて“密度”のみによって思考、実現するという驚くべき試みがある。この試みは今後の建築空間の新たなあり方へ多大な貢献を果たすに違いない。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。